



発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第五十一号（一日発行）  
平成五年十二月一日

# 北海の古平風土物語（十七）

## 慶事のしるし 丹頂鶴が舞い来たる

高橋 源 五口

この年（大正十二年）の秋、十月半ば過ぎごろ良い天気が続いていた。浜町の西のはずれの「晴耕園」、関口さんの池の庭におめでたいしるしの丹頂鶴が舞い降りたとのことで、町中大評判になった。同級の故関口秀哉君の家である。同級のいとこである関口孝君も、父親が病没後、伯父に当る秀哉君の家に寄寓していた。

明治初年に古平町役場の書記官を辞した祖父の関口利勝さんが、この地をひらいて農園（晴耕園）をつくり、当時全く珍しかったりんご苗木を植えつけて栽培を始めたという。こうして

× × ×

古くから農業開発に大きな貢献をされてきた。太く、高い老木の門柱を入れて、りんご畑を通り古式な門をくぐった。そこには支配人をしていたという山下さんの住む家があった。広い屋敷の奥の方に関口さんの本宅があつて、その前の下の方に大きな池が見えていた。

× × ×

秀哉君、孝君は、あの池に舞い降りるんだと言う。人影を見ると逃げてしまうと言うので、三人は静かに縁先の方まで行つてうさくまっていた。

「おめえの筆入れの音をたてるなよ」と言われて、私は道具包みをぎっしりと抱きしめて鳴らないようにしていた。

（当時、学用品は、本も雑記帳もブリキ製の筆入れもいっしょ

にまとめて、風呂敷に包んでひもで縛り、下の方に丸弁当の包みを下げてそれを背負つて通学していた。歩くときブリキの筆入れがガラガラと音をたてるのであつた）

私は、軒先から下がっていた珍しい青いブラブラ瓢箪（ひょうたん）を見上げながら、池に降りて来る鶴を待った。

しばらく待ったが舞い降りて来ない。秀哉君は、「おがしいなア。どごさが行つてしまったんだがなア。」と言う。孝君は「裏の方さ行つて見ねが、来てるがもすらねえ」と、裏手に廻つた。そこは小高い裏山に続いていて。うっそうとした林で遠く摺鉢山に連なつていて。

秀哉君が「あつ、見つけた！ いだいだ、あらあら！」と指さした。大きな赤松の枝のところに、一羽の大きな鳥がうさくまるようにして止まつていた。

羽毛は真っ白で、くちばしは長く、頭のとっぺんが紅い。絵で見ていたのとよく似ていた。おめでたい鶴を見たのであつた。

貰つた二つの青瓢箪を懐に入れた帰り道、あの鳥はおめでたいのかなあ、ほんとうに千年も生きるのかなあ？ と思ひながら

× × ×

家に帰つたのである。家で夕食時に、鶴を見た話をした。

「おめえよがつたなア」

「おめえも、おめでたくなつたんだ」

「瓢箪まで貰つて来たんだもせえ」と、みんなにはやしたてられた。

この鶴は、関口さんの池と、近くの困支店（高野さん）の池で鯉やふな、どじょうなどを沢山喰つて、数日後、元気に南の方に飛び去つたということであつた。

× × ×

雪の深い、古平町はじめ積丹半島一円に渡り鳥の鶴が舞い降りた話は珍しく、この時だけのことであつたように思う。

私たちは幸運にも、この珍しい、おめでたい丹頂鶴の姿をこうして見ることが出来たのである。

アイヌの《ことわざ世間ばなし集》からは休みます。



# 「穂と名達さんの おじいちゃん」

昨年、本町で吉田一穂展が開かれ、今年は小樽でも開かれたせいか、本町にある一穂の詩碑を訪ねて来る人たちが多くになりましたが、大変喜ばしいことです。百年に一人出るか出ないかという郷土の生んだ大詩人、亡くなつてからこんな有名になるとは？ それにしても、急いでその遺作等を保存する郷土館的なものの設立が望まれます。

## 故郷を想ひ 福井孝平

によれば、おじいちゃん（名達博さん）が六年生の時答辞を読むことになりましたが、その時の担任であった阿波萬先生（児童や町民からの信望が厚く、死後、教え子たちが今のお墓を建てたのです）が、二年先輩の吉田田雄君（一穂）に相談してみなさい、と言われたそうです。一穂が手を加えたという答辞はどんな答辞だったのでしょうか。これが縁で二人の交友が始まり一穂が上京後もますます交友は深まっていきました。その当時の手紙が今も大事に

私の知る限りでも、受け入れる施設があれば資料を寄贈してもよいというお話もあり、ありがたいことだと思っています。お墓や詩碑を訪ねられた方がぜひにどの希望で、新聞店の三浦さんや商工会の佐藤さんが、好意で案内役をかってってくれています。ときには自腹で積丹までも行ってくれるなどご苦労様でした。

また、三浦慶子さんのお話し

保管されていて、一穂の苦惱する青春時代が浮き彫りにされているようです。今となっては大変貴重な資料であり、宝として大切に保存しておいて下さい。九十二歳を迎えられる、おじいちゃんのますますのご健康を願ひしてご紹介まで――。



# 古平場所と岡田家

岡田屋のはじまり

## 安土の城下に移住

天正四年（一五七六）といつてもピンとこないが、織田信長が安土城を築城した年である。ようやく天下も統一され、豪華で有名な城が出来たことによつて、それまでは名もないような一村落だった安土が一躍天下に知られるようになり、多くの人がこの城下町に集まつて来た。こうした新興地に、岡田屋の初代となった玄秀・岡田弥三右衛門（げんしゅう・おかだやさえもん）が、父母に連れられて移住したのが、九歳の時であった。それから六年後、彼が十五歳の時の天正十年（一五八二）に本能寺の変が起き、安土の町は嘘のようにあつてなくなさびれていってしまった。

## また移住し店を開く

天正十四年（一五八六）豊臣秀次が八幡山（滋賀県八幡町）に築城し、その山の下に新しい町がつくられたことから、岡田

家は再びそこに移住し商店を開いた。当時の近江国蒲生郡八幡町に開いたこのささやかな店舗が、後に岡田家二百数十年の繁栄の基を築く出発点となつたのである。

しかし、初めから商売がうまくいったわけではなかった。移住して四年後の天正十八年（一五九〇）、関白秀次が亡くなるこの町もまた急激に衰退してしまつた。

## 東北地方へ行商

その時二十三歳であつた玄秀岡田弥三右衛門は、店にある呉服反物を背負い東北地方に向けて行商の旅に出た。行商をしなからとうとう本州の北の端、下北半島の川内村（青森県下北郡川内村）にたどり着いた。彼が行商に出てから七年目であり、三十歳になつてた。

若い彼の胸中にさまざまな思いが駆けめぐつたが、彼はここで、その後の人生の大きな転機をむかえることとなつた。





# ふるさとと の群像

## 古平のすけそ漁を開拓

— 松田力三郎さん —

— 2 —

大正の初期、十萬貫（三七〇  
こ）以上も水揚げのあった鱈も  
昭和になると減少し、鯨の不漁  
も重なって、すけそ漁が注目さ  
れるようになってきた。

このころはまだ鯨漁が主で、  
兼業としてすけそ漁をしていた  
が、その後のすけそ漁の発展に  
力のあつたひとりに、松田力三  
郎さんがいた。

松田力三郎さんは新潟県の生  
まれで、二十二歳の時、漁業を  
志して北海道に渡って来たが、  
縁があつて古平に住むようにな  
つた。しかし漁業をするにも資  
金が無く、何人かの仲間と、当  
時奨励されていたタモギタイ開  
拓に入るようになった。

開拓をしながら、鯨やいかの  
漁期になると漁に出たりしてい  
たが、十年程で土地を離れ漁夫  
として働いた。やがて一隻の川  
崎船を手に入れた。昭和二年、  
川崎船を改造し、当時としては

まだ珍らしかった、電気チャッ  
カー十馬力のエンジンを千二十  
円で購入し据えつけ、美国沖か  
ら入舸沖に出漁した。そのころ  
から、今までは見向きもされな  
かったすけそが明太魚（メンタ  
イ）として輸出されるようにな  
り、その有望なことが分かつて

## 社 興 鉄 稲倉石鉷山が操業開始 日本一のマンガン鉷山

《今日日はほんんな日》

[昭和4年]

明治十八年七月、鯨場で使う  
薪の切り出しをしていた大井嘉  
蔵、猪股五平・和田清作の三人  
が、偶然に川岸で金鉷の露頭を  
発見した。発見者の名前から大  
股鉷山と名付けて、初めは三人  
で試掘をしていたが資金難から  
中止した。その後も経営者が転  
々と変わったが、昭和四年、鉄  
興社が一萬二千元でこれを買収

きた。松田力三郎さんは、すけ  
そ漁に適した漁船や漁具の改良  
に努めながら、自らが船頭とし  
て漁場の開拓にも当つた。  
古平のすけそ漁が盛んになる  
と、昭和四年、道南の乙部町か  
ら漁船団が来るようになった。  
五、六の船に八馬力程度の焼  
玉エンジンを付け、町内の親方  
と歩合制で雇用契約を結んで漁  
をした。これが刺激になり、古  
平のすけそ漁は次第に発展をす  
るが、松田力三郎さんは、鯨、  
すけそ漁の先覚者として漁師仲  
間に名を知られた。

し、マンガンを採掘した。  
しかし、当時の世界的な不況  
のせいもあつて暫くは不振であ  
つたが、満州事変が始まると活  
気づき急激に発展した。その後  
も軍需景気により採掘量は激増  
し、昭和十九年には年産十一万  
トンを超え、日本一の生産量を誇  
るまでになった。  
戦時中は町内外から勤労挺身

隊員として多くの人たちが動員  
された。また朝鮮人労務者が多  
い時には数百人も働いていて、  
食事の不満から会社側と対立し  
たこともあつた。

やがて終戦となり不況に見舞  
われたが、やがて戦後の復興と  
共に順調に生産を伸ばし、昭和  
三十二年には三億四千万円と、  
町内の全生産額の四割強（漁業  
が五割二分）を占めた。

しかし、その後海外からの安  
いマンガン鉷の輸入に加えて、  
鉷山の宿命ともいふべき鉷脈の  
減少があり、鉷石の品位も下が  
つてきた。ここにきて経営の合  
理化も及ばず、マンガン市場の  
不況から逃れることは出来な  
かつた。

昭和四十五年、日本鉷業系の  
北進鉷業（大江鉷山を経営）に  
売山され、規模を縮小して生産  
が続けられた。

だが、その後も市況は悪化す  
るばかりで、ついに昭和五十四  
年七月、稲倉石鉷山の閉山が決  
まつた。一世紀を超えて金・銀  
・マンガンなど鉷石を生産し、  
最盛期には従業員が八百人を数  
え、東洋一とまで言われた山の  
歴史がここに終わりを告げたの  
である。